

経済学がもっと面白くなる〈情報&メッセージ!〉

北海学園大学 経済学部報

【エコノ】

2013.夏・秋号

econ

No. 28



特集 経済学部ゼミナール協議会を知る

密着！経ゼミ協

新旧対談／ゼミ対抗ソフトボール大会

連載 研究室の窓から

interview OB訪問ー働きマン①

News 1 フェアトレード特別講義／

News 2 2部基礎ゼミボウリング大会／

◀ 写真：経ゼミ協のみなさん

宮本章史先生

八雲町役場 竹内友身さん

& 本間直人さん

法学部 × 経済学部カフェ／

2部佐藤ゼミOB 特別講義

経済学会主催講演会／就職情報

特集 密着! 経ゼミ協

●「経ゼミ協」新旧対談●

学生組織の経済学部ゼミナール協議会(以下「経ゼミ協」)は、いまから50年ほど前、昭和41年(1966年)に発足しました。じつに長きにわたる伝統をもつ団体です。その立ち上げに関わったのが、当時学部生だった経済学部教授の小田清先生。現会長である渡辺涼美さんと小田先生のお二人に「経ゼミ協」の50年、発足経緯から現在の取り組みに至るまでをたどっていただきました。司会はecon.委員の川村先生です。(以下敬称略)



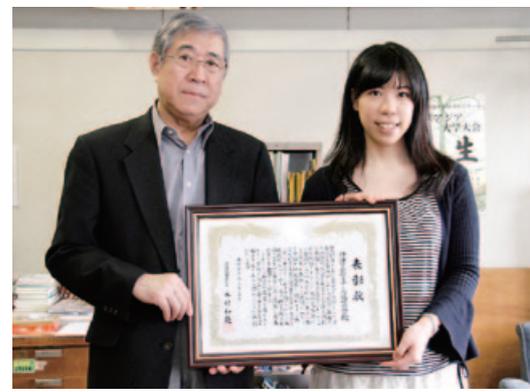
川村●そもそも経ゼミ協の発足にはどのようないきさつがあったのですか。

小田●経ゼミ協が出来たのは当時の大学環境が背景にあります。国際的には何があったかという、アメリカがベトナム戦争に突入して行き、そこから日本でも反戦運動、学生運動が全国的に盛んになります。それに重なり大学改革の運動が起こっていくという背景がありました。これは全国的にどの大学でも起こってくるわけです。しかし、勉強したいという学生も中には沢山いるわけです。当時、北海道には社会科学系大学は二つしかなく、北海学園大学には優秀な学生、研究熱心な先生方が続々と入って来ていた時期でもありました。研究に活発な雰囲気さがすごくあったんです。それで学生紛争で混沌としている中でも、やる事はきちんとやろうというような機運が出てきて、それで1966年に経ゼミ協ができたんです。内越さんという先輩が初代の会長で、学生自治会組織の正式な機関として学生大会で可決承認されました。

川村●具体的にはどんな活動からスタートされたのですか。

小田●プロゼミ(注1)などに参加したことで刺激を受け、学内でもテーマを決めて討論会をやろうと。まずは大学祭の一環として十月祭に企画参加。上原学長が挨拶し、学内初のゼミナール大会ということで気合いが入っていました。この時は当時あった経済研究会、地域開発研究会など社会科学

系のサークルも含めて13ゼミ・団体の参加で、これが「第1回学内ゼミ」と言われているものです。1966年の10月ですね。第2回が67年です。これがその時の実行委員会と大会風景の写真です。そして3年生の時に、福島大学で東北北海道のプロゼミが開かれ、当時100名規模でそのプロゼミに参加しました。とても盛んだったんです。本学からは10ゼミくらい行って報告しました。不景気、学生紛争など社会の混乱というものもあったけれど、その中で経ゼミ協が中心になって「北海学園大学の経済学部というのは随分勉強してるんだ」という事を学内外に示そうということで始めたのが学内ゼミナール大会でした。その成果をふまえて翌年にプロゼミに出かけて行き、そういう流れでインゼミ(注2)も行きました。当時の学



インゼミ開催により大学から授与された表彰状(2012.3)を手に、小田教授と経ゼミ協渡辺会長

生は学ぶ意欲が旺盛でした。

川村●その時は、プロゼミは既に開催されていたんですね。

小田●プロゼミは北海学園大学大会で13回目だから、1956、7年からあったんだね。13回大会の報告書を作ったんですが、各部門のテーマを今見てもなかなか面白いですね。



渡辺●学内ゼミナール大会というのはその後も継続して行われていたんですか? 先程10月頃と仰っていたので、今のプレゼン大会につながっているのかと思いました。

小田●プレゼン大会はまだ4年くらいでしょう。学内ゼミナール大会は5~6年は続いたんじゃないかな。経ゼミ協は経済学部の全ゼミを網羅していたからサークルとは違う、そういう意味では我々が経済学部をしょって立ってるみたいな顔して歩いてましたね。勉強したからね。当時は3年生からゼミ、ところがゼミナール協議会で、2年

写真左上:1966.10.第1回学内ゼミ、写真左下:1967.10.第2回学内ゼミと写真下:実行委員記念写真(前列右から3人目が小田先生)



● 経ゼミ協、初夏の一大行事~ゼミ対抗ソフトボール大会フォトドキュメント!~ ●

1 参加ゼミの受付と対戦トーナメントの抽選



1



2



3



4



5



6

3 4 5 ソフトボール大会当日月寒グラウンドで会場設営

6 参加賞



注1：プロゼミ／日本学生経済ゼミナールに加盟する東北、北海道地区（ブロック）のゼミナール大会。北プロのこと。
注2：インゼミ／「日本学生経済ゼミナール大会」のこと。全国の経済学を学ぶ学生が一同に集まり、普段のゼミを通じた勉強の成果を披露しあう（インターゼミ）大会。

▲経ゼミ協主催の学内プレゼン大会

生で勉強したい学生を募集をして、本を読んだり討論をしたりジュニアゼミナールというのを行ないました。そういう後輩を育てて、経ゼミ協を担ってもらうわけですよ。それから一般のゼミも、経ゼミ協に熱心に参加しているような有志の人たちが集まってサブゼミというのをやっていました。本ゼミが終わった後、あるいは曜日を変えて、自主的に本を読んだり、すごみんな勉強しました。僕らの時代は、今の一号館と二号館、三号館しかなかった。それで生協の食堂なんか木造の建物で石炭ストーブが燃えていた、そういう時代だった。経ゼミ協の部屋ってどこだったかな。木造の寒い所で、皆固まってストーブにあたっていた記憶があるな。

川村●草創期の活動を大分伺いました。当時の学生の息吹が伝わってきますね。では、渡辺さん、今の経ゼミ協の活動や取り組みを紹介頂けますか。

渡辺●4月に新入生に向けてゼミまわりをしてソフトボール大会についての説明、ゼミ協費についてのお願



いをして、6月には大きなイベントのソフトボール大会を行っています。経済学部新しく入った1年生には、ゼミの中での親ほくを深めてもらうという意味もこめて毎年行っています。秋になると、基礎ゼミを対象にプレゼン大会の準備が始まります。プレゼン大会は、先輩たちが始めたもので、先生方からも「今年もやらないの」という声を多く頂き好評ですので、恒例になり毎年行っています。そして学外の活動としては、北プロ大会、インター大会の運営に携わるといふかたちで参加しています。

川村●どの活動も教員には好評です。ソフトボール大会でゼミの団結力が向上するし、プレゼン大会や北プロ・インター大会への参加を目標にするゼミにとっては、ゼミの調査研究活動にも力が入りますね。

渡辺●ただ悩みもあって、例えば北プロ大会への本学からの参加ゼミはここ数年はゼロ。また私のずっと先輩の代でいっとき経ゼミの活動が途絶えたこともあって、過去の蓄積が伝達されていないところもあります。

川村●経ゼミ協の長い歴史を振り返ると、活動の停滞したときもあるんですね。

渡辺●10年くらい前に一度なくなったというお話を聞いています。当時のOBの方に今年お会いしてお話を聞かせて頂いたんです。当時経ゼミ協をやる人がいなくなり、ソフトボール大会がなくなっちゃって、友達とかを集めてもう一回経ゼミ協を作ってそこからまた再スタートを切ったということでした。

小田●経ゼミ協と会員というかな、ゼミ会員との間の意思疎通が段々離れていって、一体経ゼミ協というのは何をやっているの？という風になっていったんじゃないかな。大事なのはね、今経ゼミ協が何をやっているかということを常に知らせておくことなんで

す。かつては「ゼミ協通信」を発行するなど、情報発信・交流に力をいれていたし、ゼミから必ず1人は経ゼミ協の会議に参加していた。経済学部の学生が、自分は経ゼミ協の一員であることを自覚するような取り組みが必要ですね。昔は何時間も議論したり、経済論集も発行していた。会議なども定期的に必要ですよ。発足当時は、ゼミ協通信というのを年に12回発行している。前の年から何をテーマにしてやるかとか、プロゼミが来年はどこだとか、経ゼミ協は今何をやっているんだという、それを常に会員に知らせ、自分達もやらなきゃだめだなという雰囲気を作っていました。

渡辺●すごいですね。私達はイベントの準備などは全員で力を合わせて取り組むけれども、活動の方針などは必ずしも十分に議論できていません。個人的には、ソフトボール、プレゼンだけではなく、例えば講演会の開催など、いろいろな活動を実施していきたいと思っています。情報発信という点では、ツイッターを始めたところですよ。

川村●2年生から専門ゼミが始まるんだけれども、1年生のゼミ選択時の前にでも、ゼミの説明会、紹介を経ゼミ協で行うとか、企画をやれば1年生がどどどと来ると言うよ。とにかくゼミの情報がないわけだから。「あのゼミはじつは・・・」とか、学生目線で語ってもらえると、教員が話すのとは違って面白いと思うよ。講演会などは単独開催が無理なら、教員と共同で実施すると良いかも。そして、皆さんはITを使うことに慣れているのだから、ホームページの作成などにも挑戦してみてもいいかな。もちろん、顔をつきあわせた会議や議論がまずもって重要だけだね。

小田●会員である意識もね。今は経ゼミ協



上から、1968.3に大学から授与された表彰状、第13回プロゼミ北海道大学大会報告書

7 小田ゼミも参加、結果は？ 8 ボールボーイ 9 大会本部

10 11 後片付け、会場撤収「5日間お疲れ様でした！」



7

8

9

10

11



写真左：2010.8.25・26 北プロ（第54回東北・北海道学生経済ゼミナール大会）、写真中・右：2012.17・18 インゼミ（第58回全国学生経済ゼミナール全国大会）※いずれも本学開催

の会員だという意識が薄い。今とゼミ数は異なるが、かつては役員というのは必ずゼミから一人は出る事になっていたわけです。それがゼミナール協議会を形成するんです。その中で互選で会長や副会長、総務部長、財政、企画、渉外、編集というのを決める。随分役職があるんですよ。中身がある活動をしないと発信するものが出てこない。

渡辺●そうですね。私達も今の3年生の中で、次の役職を誰にするかというのがそろ



経ゼミ協の部室にて新旧対談

そろ話題になってきているんですけども、悩んでいます。もっともっと工夫して改善するところはあるなって、今お話を聞いていて本当に思いました。

川村●北プロの参加が全然ないみたいで悩んでましたね。結局、こういう活動に参加している人間にはわかるんだけど、多分他の学生は知らないのだと思う。代表者会議で情報は提供されているかもしれないけど、そこで多分止まっている。代表者自身も多分何をすべきかよく分かっていないので、一度、「経ゼミ協とは何ぞや」という感じで整理して、学生に伝えるとよいと思うよ。

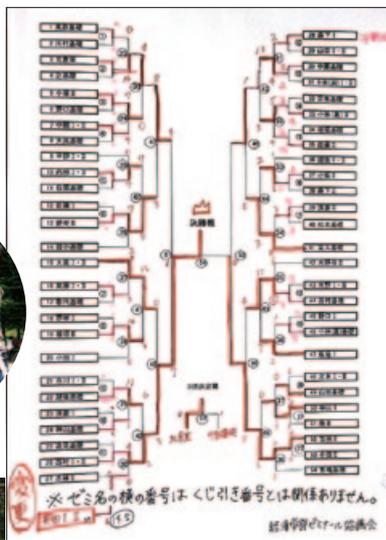
渡辺●はい、私一人がそう思うだけではなく、経ゼミ協全体でそういう意識が高まって、色々な事をもっとやっていこうという前向きな思考というか、そういうものを共有できたら、これまで以上の取り組みが出来ると思うんです。現時点では、一年間の活動

スケジュールが大体決まっているので、経ゼミ協の活動はこれをやれば良いっていうように固定しちゃっています。確かにソフトボールとかプレゼンなどの学内での行事や運営だけだと、経ゼミ協というものが、凄くもったいないと思います。先ほどの先生のお話にありましたけれども、情報を発信するのに通信などを作ったり、そういう事も始めて行きたいです。外部の方を私達の力でお招きして講演会を開催するという事も、出来るかどうかはわかりませんが、先生方のお手伝いから始めるという形でも挑戦してみたいと思います。来年の北プロの開催が本学なので、仕事が増えて活動が少し活性化するかなと思っています。

小田●随分と大学のありようも変わってきましたが、ぜひ経ゼミ協発足当時の理念を引き継ぎながら、新しい取り組みにもどんどんチャレンジをして頑張っていたいただきたい。

渡辺●はい、頑張ります！

1部ゼミ対抗ソフトボール大会



今年のゼミ対抗ソフトボール大会は6月10日から14日まで月寒公園坂下球場で行われましたが、整備の都合で片面しか使えないこともあり、大変厳しい日程での開催となりました。試合時間や休憩を短縮し、1日当たりの試合数をできるだけ増やすことで、何とか開催できました。天気については4日目まで晴天に恵まれましたが、最終日は時々激しい雨で試合が中断する中、決勝を含む大事な試合をせざるを得ない状況でした。結果ですが、優勝は西村ゼミⅠ・Ⅱ、準優勝は古林ゼミⅡ、3位は北倉ゼミⅢとなりました。決勝戦は両者ともに盛り上がった応援で白熱した試合となりましたが、6対0で西村ゼミが勝利しました。西村ゼミは勝ち上がってきた勢いそのままに1回表打線爆発で6点を先取し、それを守りきったという展開でした。3位決定戦は北倉ゼミⅢ対中園ゼミ基礎で争われ、8対1で北倉ゼミⅢが勝利しました。2回・4回に北倉ゼミがそれぞれ2得点、4回に中園ゼミが1点を返すが、北倉ゼミは5回にも4点を追加、リードを守りきりました。

▲決勝戦に勝ち進んだ西村ゼミⅠ・Ⅱと古林ゼミⅡチーム

研究室の窓から

子どもや若者を支援する福祉国家像を求めて—スウェーデンの経験から—

宮本 章史 経済学部講師
みやもと あきふみ

[専門は社会政策・福祉経済論、租税論]

●主な論文に、『『社会的投資国家』の経済思想—スウェーデンにおける積極的労働市場政策の思想的系譜—』（『思想』第1047号、7~13頁、岩波書店、2011年7月、共著）など



スウェーデンってどんな国？

みなさんは、スウェーデンの子育て政策と聞くとどのようなイメージを持つでしょうか。学生に尋ねてみると、「税金は高いけれど、そのぶん保育には手厚い」といった返答が多くみられます。確かに、スウェーデンは今でこそ福祉大国として有名ですが、実は1930年代初頭のストックホルムでは風呂もシャワーもない住宅が85%という状態でした。しかしそんな苦しい状況の中でも「社会全体で子どもを支える」という理念が示され、1930年代以降、寛大な出産手当や児童手当などが整備されていったのです。これは、家族（特に女性）が子育てをするのが当たり前だとされていた日本とは大きく異なる点です。ただしスウェーデンは福祉だけを充実させたわけではありません。実はスウェーデンでは「男性も女性も働き続けることで社会が豊かになる」という観念が古くから存在していました。つまり子育てを社会で分担するかわりに、女性は結婚し、出産をした後も働き続けることが前提とされていたのです。

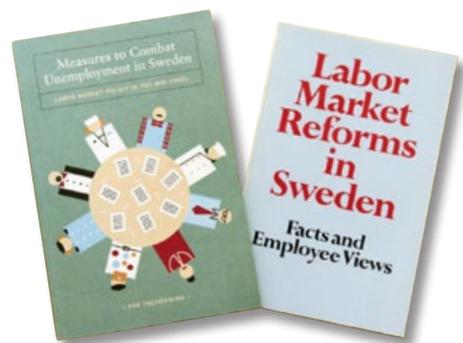
さて、生まれた子どもたちも大きくなればいずれ働くわけですから、今度は彼/彼女らが労働力として生産活動に従事するようになります。すると、その成果の一部は政府へ「税収」という形でフィードバックされます。そして、再び政府がその財源をもとに手厚い福祉政策を打ち出すというわけです。こうした国家を、私は「社会的投資国家」という名前で取り上げ、研究を行ってきました。



宮本先生が担当する社会政策I

ところで、こうした社会によるサポートが必要なのは子育てだけではありません。さきほど述べたように労働年齢になった若者が自立し、スムーズに労働市場へ参入するためのサポートもまた、必要となってきます。これらは積極的労働市場政策と呼ばれ、スウェーデンでは1940年代から国が失業者や若者に対し手厚い教育・職業訓練を実施してきました。特に興味深いのは、職業訓練の内容です。たとえば1970年代のパンフレットをみると、ある女性がそれまで働いていた職を辞め、金属部品製造の職に就くことを希望し、その訓練を受けている様子が紹介されています。特に労働需要が高い分野では、このように失業者でなくとも訓練を受けることができ、しかもその対価として補助金が支給されていました。なお、そのパンフレットでは次に、ハンバーガー店を退職した後、6か月間にわたり児童ケアサービスに関する職業訓練を受けている男性の事例も紹介されています。ここで彼は、この訓練が終わったあと、共働きの家庭が利用する保育施設で働きたいと述べています。この二つの事例をみるだけでも、「皆が働き、皆で子どもを育てる」というスウェーデン社会の理念が感じられるのではないのでしょうか。日本の労働・育児政策を考えるうえでも非常に示唆的です。

しかしながら、もちろんこうした事例を現代にそのまま当てはめることはできません。工業社会からポスト工業社会へ、すなわちサービス業が主体となった現代では、職業訓練を受けたからといって、かつての自動車産業のような雇用の受け皿があるとは保証できないからです。むしろ情報社会では必要とされるエキスパートの数は限られると思います。事実、近年のスウェーデンもまた、こうした問題に直面しています。では、どうすれば職業のミスマッチは解消されるのでしょうか。私は、今こそ地域に、そして中小企業に目を向ける時だと考えています。例えば日本だと、大学生は



左：『スウェーデンの対失業者施策』
右：『スウェーデンの労働市場改革』

就職活動において大企業を志望する傾向が強いのですが、雇用の数からみれば中小企業の方が圧倒的に多いわけです。特に北海道では、それぞれの地域に根差した仕事や生活の場がたくさんあると思います。そのため、中小企業の方に若者を（特に正社員として）雇用してもらおう機会を増やすこと、また若者が地元の人と交流できる場を増やすことが重要となってきます。

話がすこし日本にそれましたが、このように若い世代を「人的資本」として捉え、公的なサポートを「彼/彼女らへの投資」と考えるのが「社会的投資国家」の思想です。（もちろん、その人すべてを「資本」とみなすわけではありません。）私はこうした考えが、先進諸国の若者向け政策の理念として根付く可能性が十分にあると考えています。このように、スウェーデンの歴史的経緯を辿ることが、ひいては現在の国家のあり方について論じる大きな手助けとなるわけです。

なお、これまでは主にスウェーデンの研究を行ってきましたが、最近は他のヨーロッパ諸国での子育て支援や若者の就労支援政策についても研究を行っています。ここでも、子どもや若者に対する「社会的投資」が本人のみならず社会にとって有益であると論じられてきたことを指摘し、それが現代の日本の子育て・若者政策に示唆的であることを述べる予定です。



自治体職員をめざす、後輩諸君へのメッセージ

竹内 友身さん

たけうち ともみ

& 本間 直人さん

ほんま なおと



北海道三大行灯祭りとして有名な山車行列の前で、毎年訪れている内田ゼミ生と後列は本学OBの職員のみなさん

道南の渡島半島中央に位置する八雲町。将来は北海道新幹線の新駅設置も予定されている北部渡島・檜山の中心都市である。この八雲町の役場で一般行政職として働く本学部OBの二人を訪ね、卒業後の進路を決めた経緯や現在の仕事について伺った。

◀北海道における木彫り熊の発祥の地として有名な八雲町。町の名産の木彫り熊を持って。

自治体職員をめざしたきっかけ

入庁22年目の竹内友身さんは、総務課人事厚生係で町職員の給与や福利厚生を担当する中堅職員だ。一方、今春入庁したばかりの本間直人さんは財務課課税第二係で固定資産税を担当する。二人のように道内の市町村で自治体職員として活躍する本学出身者は多い。

竹内さんは生まれも育ちも八雲町で、幼い頃から実家が営む小売業を継ごうと思っていた。ところが本学で学んで八雲へ戻ろうとした時、急遽お兄さんが商売を継ぐことになる。竹内さんは「卒業後は八雲に帰ろうと決めていましたから、地元に戻るのであれば安定性のある役場に入ろうと考えました」と率直に話す。

本間さんは函館生まれだが、小中高大学と札幌で育った。祖父母が暮らす七飯町と同じ渡島管内で自治体職員をめざした動機は在学中に固まった。「1年生の時、内田和浩先生の地域社会論の講義を受けて、それまで自分が抱いていたお堅い公務員像が覆されました。地域の中で、地域を支えながら自らも活躍する自治体職員という生き方があることを知りました」と本間さんはいう。さらに2年生の時は議員インターンシップに参加した。「僕は小樽市議のもとへ通いました。ちょうど冬で“小樽雪あかりの路”というイベントを通じて様々な立場の人たちと関わりを持ち、地域の魅力



竹内友身さんprofile●1969年八雲町生まれ、1987年八雲高校卒業、本学経済学部経済学科入学、1991年本学部卒業、八雲町役場勤務

を引き出す活動のおもしろさを知りました」と話す。地域のよさを生かすことができる自治体職員になりたいという思いは強くなった。

学園大の仲間意識、交流から受けた刺激

大学時代の思い出を尋ねると、竹内さんは「私はサークルには入っていませんでしたので、講義の前後に学生会館で友人たちといつまでも語り合った時間が思い浮かびますね。同じように自治体職員として石狩市や滝川市に勤める友人とは今でも連絡を取り合っています。学園大の仲間意識というか、そういう人間関係が大きな財産になっています」と話す。学業のほうは「3年の時に小田清先生のゼミを取りました。このゼミで平取町の二風谷へ出かけて、萱野茂さんからやがてダム建設によって土地が水没するという話を聞いたことが印象に残っています」と振り返る。

一方、本間さんは、学内のサークル活動ではスポーツ観戦愛好会に所属するかたわら、自身が経験した議員インターンシッププログラムを運営するNPO法人ドットジェイピーの北海道支部スタッフとしても活動に参加するようになった。「ここには道内各大学からスタッフが集まってきました。公務員をめざすにせよ、民間企業をめざすにせよ、意識の高い学生が多く、交流の中で様々な刺激を受けました」という本間さん。

求められるコミュニケーション能力と行動力

行政マンの仕事は何が大事か、竹内さんによると「役場は地域の皆さんを相手に仕事をしています。ですから、まず住民の話をよく聞くことが第一。その上でこちらが説明して、理解してもらって、ものごとを進めていくのが基本です。時間がかかるし、まとまらないこともあります。そういう積み重ねによって行政に対する信頼が生まれるし、一生懸命やっているという評価にもつながります」。「そういう意味で、自治体職員をめざすならば、やはりコミュニケーション能力があって、さらに率先して何でもやる人が求められます。それがあれば先輩からメンコがられます」と付け加える。自

身の思い出に残る仕事としては、人事厚生係の前の総務係で選挙事務を9年ほど担当した。平成17年の熊石町との合併直後は、道内町村では前例のない選挙区を設定する選挙となり、本州の先行自治体に問い合わせ、色々教えてもらいながら進めた。平成12年の地方自治法の大改正に伴う町の条例規則の改正作業も、残業続きのハードな仕事だったという。

配属間もない本間さんに、実際の仕事について尋ねたところ、「実は最初、財務課は予算をつくる部署というイメージでした。僕は固定資産税を担当していますが、これは土地や家屋などの資産を評価して、その価値に対応する納税通知書をお送りして、固定資産税を



本間直人さんprofile●1990年函館市生まれ、2008年札幌西陵高校卒業、本学経済学部地域経済学科入学、2012年本学部卒業、2013年八雲町役場勤務

払っていただく仕事です。町民の方から電話はかかってくるし、窓口にも来られるし、実際に土地や家屋の調査に訪問することもある。デスクワークだけではなく、忙しく動き回ることがたくさんあります」と驚きを隠さない。竹内さんの指摘どおり、コミュニケーション能力や行動力は欠かせないようだ。

八雲町役場では現在、一般行政職235名中、北海学園大卒が11名を占めている。平成25年度は大卒採用者5名のうち北海学園大卒は本間さんを含めて2名が採用され、ここ数年は毎年北海学園大卒業生が入庁している。竹内さんは「平成26年度は7名程度採用予定です。門戸は皆さんに開かれています。八雲町は自然に恵まれ、買い物や医療、生活環境も充実しています。都会ではないけれど、全くの田舎でもない。“ちょうどいい田舎”です。意欲ある人はぜひチャレンジしてください」と後輩諸君に期待を寄せている。

[平成25年4月19日] 発展途上国論特別講義

「フェアトレードの現場から届いた生の声」

日本でも指折りのフェアトレード団体「シャプラニール」の前ダッカ駐在員・菅原伸忠さん(写真左上)に、バングラディッシュでのフェアトレードの取り組みについてお話を伺いました。シャプラニールの「石けんプロジェクト」は、元セックスワーカーの女性たちによるナチュラル石けん生産を通じた、彼女たちの経済的自立を進めるためのプロジェクトです。現地のパートナー団体、輸出団体、そして日本のフェアトレード団体というフェアトレードの仕組みの解説は、実際に商品として流通している流れとリンクしてわかりやすいものでした。また、菅原さんが現地でおこなった生産者たちへのインタビューの聴講者参加による再現(写真右上)は、単に聞くだけではなく、講演会を楽しいものとしてくれました。このような、理論的な話だけでなく、実際の経済の取り組みについて身近に感じながら学べる機会も大学ならではの醍醐味です。



[平成25年5月20日] 第19回法学部×経済学部カフェ

「若者の貧困とテレビ報道」



本学法学部の人気企画に経済学部がジョイントさせてもらう形で、「法学部×経済学部カフェ」が開催された。テーマは「若者の貧困とテレビ報道」、講師は法政大学教授の水島宏明さん。水島さんは、ドキュメンタリー作家として長く勤めてこられ、社会的に弱い立場の人々や生きづらい人々にカメラを向けた作品で数々の賞を受賞してきた。「母さんが死んだ～生活保護の周辺」、「天使の矛盾～さまよえる准看護婦」のほか、最近では、ネットカフェ難民の存在を世に知らしめた「ネットカフェ難民～見えないホームレス急増の背景」があげられる。当日は、これらの作品も使った水島さんの講演を聞いた後、本田宏教授(法学部)・川村雅則准教授(経済学部)を聞き手に、貧困の実態や貧困問題へのマスコミのアプローチのありかたを掘り下げ、なおかつ、私たちの「貧困観」について考えた。けなげでかわいそうにみえる貧困者には同情するが、そうはみえない貧困者には厳しいまなざしを向けがちな視聴者の話を聞くなかで、果たして私たちは、貧困を、あるいは人間を理解しているといえるのだろうか、そのことを強く考えさせられた。



聴講者(写真左)の質問に答える水島教授(写真右の中央。左は川村准教授、右は法学部本田教授)

[平成25年5月29日] 2部ゼミナール

「佐藤ゼミOB特別講義」●鈴木康洋氏

OBの鈴木康洋さん(写真右上)をゼミに招いて特別講義を行いました。彼は在学中から花の卸売会社でアルバイトを続け、今も正社員として働いています。彼はもともと道内の工業高校を卒業後、東京の建設会社に数年間勤めて退職。その後で2部経済学部に入學してきたのです。ゼミには3年次から配属。他に希望者がいなかったため、彼と二人っきりで花き市場に関する文献を読み、時には朝の市場に出かけたこともあり。4年次にはゼミ論文を完成、最後に成績優秀学生として表彰を受けて卒業したのでした。

当日は、学生時代に行ってほしい3つの事柄について説明をしてくれました。一つは、授業は毎回参加し、講義内容をノートし、そして楽しんで臨むこと。二つ目は、アルバイトする場合でも就職を視野に選ぶこと、最後に、在学中は趣味や遊びも楽しむこと、こんな話だったかと思います。ゼミ生たちも様々なインパクトを受けたらしく、彼の会社でアルバイトを始めるゼミ生が現われたのは思いがけないことでした。(佐藤信教授)





[平成25年6月13・20日] 2部基礎ゼミナール

2部基礎ゼミボウリング大会

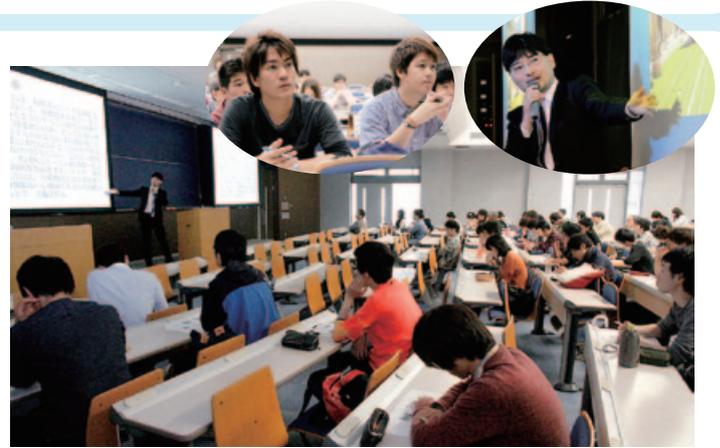
2部の基礎ゼミナールでは、ゼミ生同士の交流のためにボウリング大会が開かれました。基礎ゼミナールは1年生が履修する比較的少人数制の演習形式の授業です(14名ほど)。さて、6月13日、20日の二日に分かれて、9つの基礎ゼミが大会に臨みました。会場はサッポロテイセンボウル。投球練習の後、ホイッスルの音とともに第一回目の試合が開始。上手な人は好調なペースで点数を積み上げ、それほど得意でない人もそれぞれ個性ある投球フォームを駆使して真剣に取り組んでいました。お互い声援を送りあい、スベアやストライクが出ればハイタッチで祝福するという、いかにもボウリングらしい光景が何度も見られました。続く第二回目の試合はチームごとの団体戦として行われました。時間の都合で順位発表まで出来なかった日もあったようですが、いつもとは異なる空間でのひと時に、

ゼミ生同士、より交流を深めるきっかけになったことと思われます。また基礎ゼミ担当の教員も参加しており、教員との親睦も深めることができましたようです。

[平成25年6月27日] 経済学会主催講演会

「地方財政が支えるフランスの都市公共交通」

大阪大学法学研究科特任研究員の南聡一郎氏(写真上右)を招いて「地方財政が支えるフランスの都市交通政策」講演会が開催されました(北海学園大学経済学会主催)。南氏は、フランスでは環境保護や移動の権利を保障する「交通権」の観点から、積極的な公共交通の拡充政策が行われていることをリヨンの事例を中心に述べました。南氏が強調した点は、それを進める行政的な仕組みと財政的な裏付けについてでした。特に興味深かったのは、フランスの都市公共交通が独立採算制を放棄し、恒常的に補助金を充当する仕組みとなっていることです。その財源には都市交通からの便益を受ける企業や勤労者からの「交通負担金」が充てられます。この仕組みの元、リヨンでは路面電車やバスなど公共交通の充実を図り、利用者は大

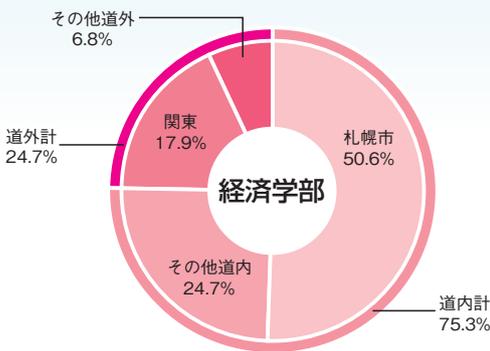


幅に増加しましたとのこと。札幌や日本の交通政策にとっても参考となる点が多く、有意義な講演会でした。

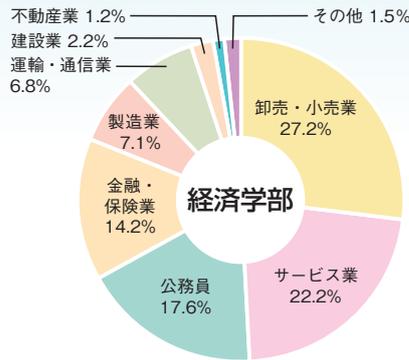
2013年就職情報

平成25年3月14日現在

↓ 本社所在地別就職状況



↓ 業種別就職状況



↓ 過去3か年の主な内定先

[経済学部のみ] ※公務員は合格者数

企業名	人数
北海道警察	35
日本郵便	17
北海道(中級)	16
札幌市役所	15
生活協同組合コープさっぽろ	11
北洋銀行	11
ホクレン	9
北海道労働金庫	9
北海道旅客鉄道	7
北海道銀行	5

↓ キャリア支援センターの主な支援活動

- 個別面談
- ガイダンス(民間・公務員)
- セミナー(面接対策・エントリーシート対策)
- 就職講演会(民間)
- 学内合同企業説明会
- 筆記試験模試(民間・公務員)
- YG性格検査、適職検査(R-CAP)の実施
- インターシップの斡旋
- 資格取得講座/公務員試験対策講座
- オリジナルポータルサイト「ミナトコム」提供
- キャリアガイダンスの実施(1年次)

↓ 公務員・教員登録状況 [平成24年度 卒業生・全学部]

名称	人数	名称	人数	名称	人数
国家公務員一般職	19	北海道	77	札幌市職員	13
国税専門官	10	警察官	11	消防	13
裁判所職員一般職	1	女性警察官	11	その他市町村	117
自衛隊一般曹候補生	14	警察庁警察官	6	その他公務員(上記分類以外)※1	4
北海道職員	40	札幌市職員	42	公立学校教員	12
上級	9	行政	3	国立大学等独立行政法人職員	96
中級	40	技術系	3	合計	487
		学校事務	3		

※1) 大学別合格者公表のない試験によるもの(本人申告分を含む)。入国警備官・刑務官など。